

八ヶ岳は、約二〇〇万年前から約一万年前までの間に活発な活動を繰り返し続けた火山が複合して生まれた。火山の多い日本でも、これだけの規模と長い活動期間を持つ火山は珍しい。有史以降噴火の記録がなく、火山であることを知らない人もいるだろう。八ヶ岳の山麓では旧石器時代以来人々が生を営み、縄文時代には特有の精神性を持った文化も栄えた。その精神や美しい自然は脈々と現代に受け継がれ、人々を魅了してやまない。本号では、人はなぜ八ヶ岳に魅了されるのか、その成り立ちや育まれた固有の風土、人々に与えてきた影響などを考える。

# 八ヶ岳 火山の一生

生い立ちをさぐる

内山高



人々の生活が伺える三つの風景、なだらかな麓里地の紅葉、中腹里山の針葉樹林(カラマツ)の黄葉、山頂の険しい岩稜と常緑針葉樹樹林が、秋の八ヶ岳連峰の様子を見事に映し出している

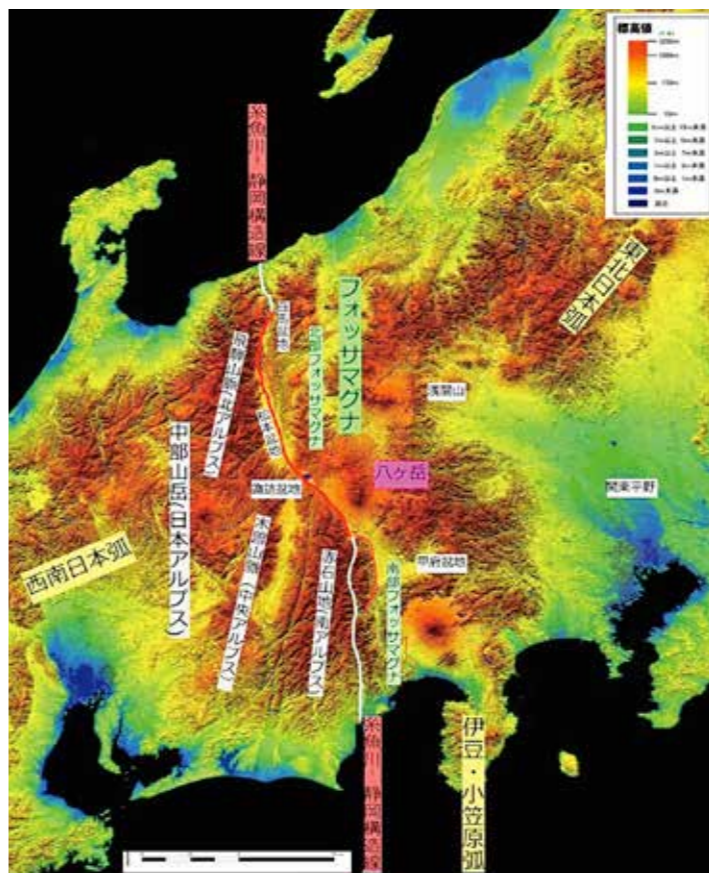
## 八ヶ岳火山ができる前

日本列島は、北は北海道から南は九州・南西諸島まで弧状の列島を形作っている。その中で本州中部の新潟県・長野県・山梨県・静岡県にかけては、三つの島弧、すなわち東北日本弧、西南日本弧および伊豆・小笠原弧が合合している場である。

東北日本弧と西南日本弧の境界が糸魚川―静岡構造線(以下糸静線と

略す)と呼ばれ、日本海側の新潟県糸魚川市から太平洋側の静岡県静岡市にかけて日本列島を横断するように走っている断層系である。

糸静線西側の高山地帯は地形的に日本の屋根として中部山岳(日本アルプス)と呼ばれ、北から飛騨山脈(北アルプス)、木曾山脈(中央アルプス)、赤石山脈(南アルプス)の三〇〇〇m級の定高性山岳地帯からなっている。これらの山脈は日本列島の基盤であ



八ヶ岳火山とフォッサマグナの位置図  
国土地理院デジタル標高地形図(北陸・東北・関東・中部)をもとに作成

り、古い年代(古生代・数億年前〜新生代前半・数千万年前)の岩石・地層からなっている。

糸静線東側地帯はフォッサマグナと呼ばれる大規模な凹地帯であり、主に新生代後半(二三〇〇万年以降)の岩石・地層からなっている。西側高山帯からフォッサマグナ凹地底までの比高は約一万メートルに及ぶと考えられている。フォッサマグナには糸静線に沿って、北部に白馬盆地、中央部に松本盆地及び諏訪盆地、南部に甲府盆地が形成されている。また、フォッサマグナは独特の地形・地質区および生態系をなし、さらに今紹介する八ヶ岳を境に、形成過程が大きく異なる北部フォッサマグナと南部フォッサマグナに分けられる。

## 八ヶ岳の地形

八ヶ岳は本州のほぼ中央部、長野・山梨両県にまたがって位置する火山で、赤岳(標高二八九九・二m)を主峰にして、北端の蓼科山(二五三二m)から南端の編笠山(二五二四m)まで南北約二一kmにわたって標高二〇〇〇m以上の山々が十座以上連なることから、「八ヶ岳連峰」と呼ばれる。



北八ヶ岳の山容

その連峰の大きさ(裾野を含む)は南北約五五km、東西最大約三〇kmで、面積は約一一五〇km<sup>2</sup>に及ぶ。また、一般的にこの連峰は中央部の峠にある夏沢峠を境にして、北八ヶ岳と南八ヶ岳に分けられる。なお、地質学的には、北八ヶ岳の麦草峠と夏沢峠の間を中八ヶ岳と呼ぶ場合もある。

北八ヶ岳の山体部は、溶岩円頂丘の茶臼山、竊枯山、(北)横岳、蓼科山等からなり、比較的なだらかな山容が特徴的である。また、溶岩円頂丘の基部には、溶岩流が流れた当時の火山地形がよく残っている。この溶岩円頂丘群に続く北―北東斜面は、谷深く開析された火山山体急斜面となっており、これら火山山体急斜面は溶岩円頂丘群よ